Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報　Web 公開版
発行日：2008.6
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.40

CONTENTS

- テーマ撮影・私の場合
- 平竜二氏講演会「プラチナプリントの魅力」
- 小野望さんの死を悼む
- リンホフ・テヒニカ 4×5 蛇腹交換方法
- 城ヶ島撮影会報告

テーマ撮影・私の場合

中島秀雄

【事前の撮影許可申請】

テーマパークや特定エリアで撮影する場合、事前に許可をもらうのがよい。一言、声をかけるだけでトラブルもなく、撮影に集中することができる。

今回、事前にテーマパークに電話をかけ、撮影許可をもらった。書面の提出が必要かどうか訪ねたが、その必要はなかった。要は、商業目的でなければ基本的に撮影は自由になっていた。

私は、再撮影のために数週間後同じ場所に出向き、このときは直接フロントに声をかけ許可をもらった。しかし、撮影している最中ガードマンに呼ばれ、「三脚をつけて撮る場合は有料になります」と言われ、面くらった。「フロントに許可をもらっています」と答えると、「それなら結構です」となった。

【撮影前のロケーション】

テーマパークには何艘かの船が係留されている。それぞれの船がどのような経緯で係留保存されたかなど個人的に興味はあるが、今回のテーマにそれほど重要ではない。とりあえず、荷物を置いてロケーションするのがよい。ロケは撮影エリヤ全体を眺め、被写体や光線状態を確認し撮影効率を上げることにつながる。偶然の出会いを求め、事前のロケーションを好まない人もいる。

船、係留ロープ、海、デッキ、スクリュー、鳥、雲、灯台、プール、人物、・・見たものをメモすることもあるが、被写体を眺めテーマと関係づけながらイメージしてみる。最初はシンプルな被写体から進めるのがよい。船、スクリュー、灯台、海は、テーマに合うシンプルな被写体といえるが、うまく撮れたとしても作品になるとは限らない。しかし、テーマ探しのストレスはこれでずいぶん解消され、余裕が出てくる。

撮影：中島秀雄

毎回、私は、シンプルな被写体から撮影に入るようにしている。いきなり難しい被写体に取り組むと時間が掛かり、くたびれてしまう。現場に到着したばかりのときはまず目を慣らし、頭が撮影モードに入る訓練のつもりで被写体を探す。見つけた被写体が必ずしも作品にならなくてもいいくらいの気持ちで、ポラロイドフィルム(注1)を使ってシャッターを切るようにしている。ポラロイドプリントは本当にありがたい。滑らかなモノクロームプリントがその場で見られ、時間をかけてここまでやって来たことの報酬のように感じる。また、その後のプリントのガイドにもなる。

【船】

今回、船を構造物としてシンプルに眺めることからスタートした。構造物として船を見たとき、その魅力は何といっても舳先のカーブと上方にせり上がる量感にあるように思う。雑誌によく見るアングルで、最初はこういう見慣れたやさしい構図から撮影に入るのがよい。しかし、前方に真っ白な船が係留され、手前の船とのコントラストや滑らかな水の光に美しさを感じ、簡単に切り上げるつもりでいた気持ちが徐々にきちんと写真に仕上げたいという気持ちに切り替わっていっ

た。

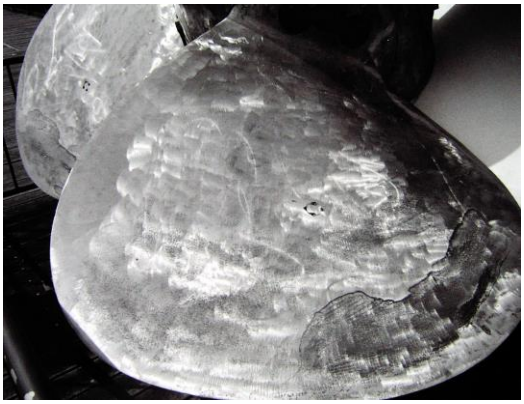
撮影テクニック

カメラの組み立ては、水平、垂直線をリジットの状態で確認することが大事だ。被写体が歪むばかりではなくピントにも影響し、後で悔やむことになる。深く絞れば大丈夫と思いがちだが、それは光軸が正しい位置にあるときのみ有効だ。各部のネジの緩み、三脚の緩みも確認する。シャッターの振動は各部の緩みに影響を与えるようで、シャープネスに関係してくる。

船の量感とシャープネスを考え、120mm のワイドレンズを使った。カメラの垂直、水平を確認し、ムーブメントはレンズをわずかにライズしている。120mm レンズを標準蛇腹にセットした場合、ムーブメントはわずかである。この場合も蛇腹に多少ストレスを与えていて、袋蛇腹(注 2)の使用を望みたいところ。ピントは舳先に合わせ、f45 まで絞り深度を得た。オレンジフィルターは海のトーンを下げ、青空を少し落としている。逆に、フィルターと同系色の船体は、わずかに明るくなっている。フィルターファクターは 3.5X とした。

引き蓋を引き、カメラのゆれを止め静かにシャッターを切る。長いレリーズは手の振動を減少することに役に立つ。撮影後、再度ピントグラスを眺め、コンポジション、ピント確認する。アオリを元に戻すことを忘れないように。(結果、ムーブメントによるわずかな蛇腹のケラレがあった。)

舳先の曲線、海水の反射、船体の丸み。向かいに停泊する純白の船。ビュイングフィルターはゾーンを明快にし、ビジュアライズを容易にしてくれる。ビジュアライズが重要で、ここが最終プリントにつなげていくポイントになる。ここを曖昧にしている人が多いように感じる。そのことをノートに記録し、イラストも描いて脳に刻印する。



撮影：中島秀雄

【スクリュー】

かつて船の推進力として使われたスクリューが展示物としてひと際目立っていた。海水を高速でかき回したことによる表面の傷が強い光に反射し、曲線と曲面に成型されたスクリュー本体は抽象的なオブジェにも見えた。

私は、見たものがどのような物であっても、被写体としてそれが面白いと感じるのは、カメラを通してもう一度自分の感性で再構成できると感じられるからだと思っている。すべての人工物は、人間の脳からどろっと流れ出て形になったものと養老猛は言っていた。しかし、すべての物が面白いと感じるかは一人ひとりの感性が異なることから一つにはならない。ここに展示してあるスクリューにも同じことが言える。被写体として何も感じない人、少しは感じる人、強く感じる人、様々だ。私は、いつもガラスや金属は写真の憧れの被写体だと思っている。光はガラスを加工したレンズを通過し金属銀の化合物によって画像形成する。被写体がガラスや金属なら素材的にマッチすることから写真にしやすいと信じている。

表面の成型跡や曲線にカットされた羽が重なり、カメラのわずかな移動やレンズによって光は変化するが、美しさは変らない。

撮影テクニック

曲線による形や表面のテクスチャーを捉えたいと思い、90㎜のワイドレンズを使って接近した。接近することで周囲の猥雑なものを排除できるし、表面のディテールを強調できると考えた。バックティルトを使って手前から奥までピントを合わせ、絞りはf32とした。シャドーをゾーンⅡからⅢ、表面はゾーンⅥ、ハイライトはⅧ、Ⅸとなった。シャドーをより明るくして、ハイライトをマイナス現像すると表面のテクスチャーは失われてしまう。どちらかというとハイライト露光になっている。バックティルトは画像面をいじるわけで、見た目より手前が少し大きくなっている。コマーシャル写真の場合、商品の歪みをおさえることからレンズ側をティルトさせることが多いようだ。（この写真は、スクリューの下と右がカットされているが、プリントには写っている。）

私達の周囲には様々な物や構築物が溢れている。私達は、それらにカメラを向け、ファインプリントにすることで実体や実景とは違った新たな美を創ることが出来る。有明、台場、晴海、日の出桟橋等。東京は海に近い。新たな水際も作られていると聞く。そこには意外な美しさを秘めた被写体が横たわっているかもしれない。気候も安定し、外に出やすい季節になっている。
写真は心のビタミンと医者も言っているくらいで、撮らないとストレスがたまり健康に良くない。たくさん写真を撮ってください。

（注１）国内販売は中止になり、フジフィルムのインスタントパックフィルムがある。
（注２）ムーブメントを容易にするために作られた袋のような蛇腹。

平竜二氏 講演会
「プラチナプリントの魅力」

荒井崇

・日時：2008 年 2 月 23 日（土）15～17 時
・会場：横浜市市民活動支援センター会議室

2008 年ゾーンシステム研究会総会後、恒例の講演会が行われた。今年は、写真家の平竜二氏である。

平さんは現在、日本ではデジタル写真で活躍するコマーシャルフォトグラファー。ニューヨークではプラチナプリントで作品を制作するファインアート作家。２つの顔を持つ写真家だ。

今回の講演では、プラチナプリント作家としての活動を講演していただいた。

平さんの主な活動拠点は、ニューヨークのチェルシー地区にあるプラチナプリント専門ギャラリー。このギャラリーは、ドイツ／ベルギー／スイス／アメリカなど世界各地のプラチナプリント作家数十人が所属しており、常に切磋琢磨しているとのこと。

現在のニューヨークは、１５０前後の写真関連ギャラリーが存在し、写真によるファインアートマーケットのほとんどがニューヨークに集約されているという。また、優れた作家をバックアップするシステムがよく整えられており、作品を提供するギャラリー及び作家と、蒐集する美術館やコレクターとの繋がり

が非常によく機能しているそうである。

今回、平さんのプラチナプリントを数点見せていただいた。また、平さんが師事した栗田紘一郎さんや、ジョージ・タイスのプラチナプリントも持参いただき、同時に鑑賞することができた。そして何と、ジョージ・タイスは平さんと同じギャラリーに所属しているという。

平さんの作品は、植物や食器、花瓶をモチーフにしており、非常に品のある東洋的なイメージを醸し出す作品だ。いくつかの美術館にも収蔵されたそうである。

（平さんの作品表現に関する理念は、添付資料[STATEMENT]参照のこと）

講演の中で、プラチナプリントの技法に関してかなり詳細に解説していただいた。

まずプラチナプリントの歴史。1873 年に開発

され一世を風靡するが、シルバープリントに押され、1917 年にメーカーがペーパーの生産を中止。過去のアートになってしまった。しかしながら、1970 年アメリカの写真家ジョージ・タイスは、フレデリック・エマーソンのガラスポジを発見。100 年前のプラチナプリント技法でプリントを再現することに成功し、そのレシピを公開した。その後多くの写真家たちがプラチナプリントを駆使するようになったとのこと。

次に、プラチナプリントのプロセスについて説明していただいた。
詳細のプロセスについては添付した資料を御覧いただきたい。ここではポイントのみをピックアップする。
・プラチナプリントは紫外線光による密着焼き。引き伸ばしはできないので、ネガより大きくプリントする場合はデュープで大きなネガを製作する。（例えばインターポジを作成し、更にインターポジを引き伸ばして大きなネガを作る。など。）
・印画紙は自作。好みの支持体（紙）に刷毛、ガラス棒などで溶液をコーティング。
・上記印画紙用溶液は、プラチナ溶液、パラデュウム溶液、シュウ酸第二鉄溶液、シュウ酸第二鉄溶液＋塩素酸カリウム溶液を混ぜて作る。
・上記印画紙用溶液は、プラチナの比率を高めると黒が純黒で締まってくる。一方パラデュウムの比率を高めると黒が締まらないウォームとなり、しっとりしてくる。また、シュウ酸第二鉄溶液＋塩素酸カリウム溶液の比率を高めるとトーンが硬くなり、感度も上る。いずれにせよこの混合比率がまずポイントのようである。
・ネガは一般的に硬めのネガがよいとのこと。
ただし平さんは、硬めのネガにしてしまうと通常のゼラチンシルバープリントがプリントできなくなってしまうため、硬めのネガにしないで通常濃度のネガを使う。そして、印画紙作成の段階で各溶液の混合比率を考慮し、硬めに出る印画紙を製作して調整しているという。
・現像液はシュウ酸カリウム又はクエン酸アンモニウムを使用。
シュウ酸カリウムは温黒調、クエン酸アンモニウムは冷黒調になるとのこと。

最後に平さんは、プラチナプリントについて以下のようなコメントをされていた。
「プラチナプリントは反復性に向いた技法ではない。が、それ故に１枚１枚個性を持つ。なぜか完璧にトーンをコントロールしようとすると作品はうまく行かない。ある程度間を持たせるとうまく行く。工芸に例えると、窯の中の火に任せるのに近い。完成させようとすると逃げていく。不完全が完成に導く。何か禅問答のようだ。そんな

中で完成した作品の魅力は何と言っても【味わい】である。」

ゾーンシステムという完璧なコントロールを目指す技法に関しても、私たちは同じような経験をしているのではないだろうか。結局最後の【味わい】というコントロールは不可能で、作者の経験と勘、そして偶然なのかもしれない。

以上、今回は、平さんに一通りプラチナプリントについて話をしていただいた。私たちとは異なる技法であり、そのトーンや色見も異なる。しかし目指すところは同じ。「味わい深いファインプリント作品」である。大変参考になる講演であった。

[平竜二氏 略歴]

1960年、熊本県に生まれる。1983年より東京に移り、高村規氏に師事。

その後フリーランスの広告写真家となり、同時にファインアートフォトグラフの制作をはじめる。

ニューヨークチェルシーにてFINE ARTS WORK SHOP（栗田紘一郎氏に師事）でプラチナプリントを修得し制作を始める。

現在、東京、ニューヨークにて活動中。ファインアートフォトグラフの発展と教育に力を注いでいる。

作品はヨーロッパ、アメリカの美術館などに収蔵されている。

[Exhibition]

2000年：「THREE VIEWS OF SEACRET」展ギャラリー・マーレ、東京
「THREE VIEWS OF SEACRET」展ギャラリー・イシス、京都

2001年：フジフォトサロン「規の会」グループ展、東京
「Plants and Iron」快晴堂、東京

2002年：「PLATINUM PLANTS」FOTOSPHERE Gallery, New York
「Plants and Iron」FOTOSPHERE Gallery, New York

2003年：「PLATINUM IMAGES」FOTOSPHERE Gallery, New York
「Photographs」Newberg Art Museum, New York

2004年：「Vicissitudes」FOTOSPHERE Gallery, New York

2005年：「Alternative Printing」FOTOSPHERE Gallery, New York

「Auction Exhibition」Woodstock Center of Photography, NY
「TIME」FOTOSPHERE Gallery, New York
2006年：「Auction Exhibition」Woodstock Center of Photography, NY
「Winter Group Show」Fotosphere Gallery,New York,USA
2007年：「PLATINUM PRINTS」FOTOSPHERE Gallery, New York
「PLATINUM PRINTS」FOTOSPHERE Gallery, Tokyo

[Recognitions(コレクション)]

カリフォルニアサンディエゴ写真美術館
パリ国立図書館等
カリフォルニアサンタバーバラ美術館

[STATEMENT]

みるということは、五感の中でも他の感覚の助けと、個人の経験などの情報がミックスされ認識されるという、幅のあるもしくは興味深い不確かさを持つユニークな感覚である。ある環境や条件に置かれた時、みるという行為は曖昧な興味深い不確かさで物の姿を変化させることがある。例えばある人は、雲の形にアルファベットをみたり水の波紋に輝く銀の王冠をみたりする。この曖昧な興味ある不確かさとは、視覚によって映されるものと、心の奥底の鏡に映しだされるものが、同様ではなく何らかの変化をもたらすことである。みるという行為の本質とは、この絶妙な異差によって成り立っている。

私の目の不確かさは、不確かである理由がある。心の奥底にある確かにみえるものをフォトグラフは映し出す力をもっている。みることよりも、確かにみえるはずのない心の奥の鏡に映るものを表出させる。フォトグラフはモチーフと光りによって創られるものであるが、実はモチーフに縛られることもなく、光りに左右されることもなく心の奥底にある鏡に映るものが物質となって表出される、極めて特異でシンプルな表現方法である。幼い頃、「僕はどこからやってきてどこへ行くのだろう」と、いつも真剣に考えていた。そして、それがみえないか、野山を駆け回り、花を摘み虫を追いかけ魚を掴み、それらを日が暮れるまで、いつまでもじっとみつめていた。この曖昧な興味深い不確かさは、私の根底に流れるものの本質をみつける大切な確かさなのである。

平竜二

プラチナプリントの魅力について　（平竜二氏作成の添付資料）

プラチナプリントの特徴

・プラチナプリントとはプラチナ（白金）を使いつくられたプリントである。引伸しできる印画紙と異なり、プラチナプリントは写真家が自家製の感光剤を作りそれを選択した支持体紙に塗り、その自家製の印画紙に紫外線による密着焼きによってプリントが作られる。プラチナはたいへん安定した性質の金属であるため、ほとんど環境により変化しない。そのため半永久的に耐久性、保存性をもつプリントができる。

・印画紙となる支持体（紙）を作品の意図で自由に選択できる。
・感光材も自家処理するためにコントラスト、トーンなど写真の表現を自由に選択できる。選択した支持体（紙）に直接感光乳剤を塗布するため、支持体の風合い（紙の質感・テクスチャー）をいかすことができる。

原理について

・プラチナプリントは引伸しを使用しないコンタクトプリントのプロセスである。ネガフィルムと未露光のプラチナ印画紙を密着させ、紫外線により露光し現像処理する。これは媒体となる感光材の感度の低いことと、紫外線に反応する特性によるもの。プラチナとパラディウムと鉄塩を混合した感光材に紫外線をあて、鉄塩 の感光性によりプラチナとパラディウムが像を形成する。

プラチナプリントの歴史

1830	塩化プラチナが光の影響により、金属プラチナになることが発見される。
1873	ウィリアム・ウィルスが永久性耐久性のある塩化プラチナを使いプリントのプロセスを発明する。 プラチノタイプカンパニーとしてプラチナプリントの販売を開始。
1895～1905	プラチナプリントはピクトリアリズムのムーブメントとも重なり、ファインアートフォトグラフの写真手法として発達。15種もの種類のプラチナペーパーが販売された。
1906	イーストマンコダック社がプラチナペーパーの販売を開始。
1911	コダック社が「ガスライト」「シルバーブロマイド」などの印画紙の発売を始める。プラチナ（白金）は第一次世界大戦の開戦により世界的に入手困難になり、プラチナプリントの生産が困難になる。
1917	コダックがプラチナペーパーの生産を中止。 プラチノタイプカンパニーがプラチナ印画紙の生産を中止。 そしてプラチナプリントは過去のアートとなる。
1970～	ジョージ・タイスは「プラチナプリント」の作り方のデモンストレーションを行い、60年ぶりにプラチナプリントの存在を人々にアピールした。 アーヴィング・ペンがハンドメイドプラチナプリントの展覧会を開くなど、プラチナプリントの存在が再び認知されはじめた。 現在、美術館やギャラリーなどでプラチナプリントの展覧会が開かれ、アーツの大切な表現の一つとして復活を遂げる。

小野望さんの死を悼む

中島秀雄

皆様には、悲しいお知らせをしなければなりません。

昨年、腰痛の検査から大きな病気が見つかり、入院を余儀なくされていました小野さんが、2 月 27 日に亡くなりました。私はその通知を 3 月 9 日に受け取り、翌日奥様に電話したところ、身内ですべて済ませたとのこと、後日、手紙を書く予定にしていましたと返事がありました。

小野さんは、研究会を立ち上げたころから熱心に関わってくれました。私が今後研究会で何をやるのか、それに興味があって会員になったといっていたことが記憶に残っています。竜串の撮影会では遅れて参加し、すばらしい写真を撮ってくれました。プリントにも多くの時間をかけ、3 作品に 50 枚ほど焼いたといっていたのが印象に残っています。

ヨセミテの撮影では常にマイペースで進め、私は、フィルターやコンポジションのアドバイスをしたくらいでした。帰りの空港では、税関のフィルムチェックにいつもクレームをつけていたことなど、ついこないだのことのように思い出します。

近年、小野さんは外国での撮影も多く、私は小野さんの作風、技術、プリントワークに大きな成長を見、「小野さんうまくなりましたね。」と声をかけたこともあり、そのときの小野さんの笑顔が忘れられません。これから完成域に近づきつつあり、本人は悔しかったことと思います。本当に残念です。

私は、2 月 15 日に病院へ見舞いに行きました。ロビーで花を買い、病室を訪ねました。
すぐに私とは気が付きませんでしたが、ベッドにすわり、涙を浮かべ悔しそうな表情で語り始めました。

8×10 カメラはあきらめ、4×5 か 6×6 に切り替える。コンタックスサロンでの展覧会の話、写真展実行委員の件、腰が痛いうちは車椅子で撮影に行きます。と、近い将来の話をしてきました。

時々眠気がきつくなっていましたが、話はしっかりしていましたので病魔に打ち勝ち、自宅療養するものと思っていました。

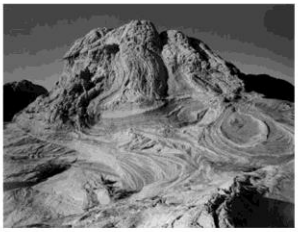
役員会では常に出席され、研究会の運営のために建設的な発言も多く、私をサポートしてくれたことで今日まで進めることができたと思っています。研究会にとりましても大変残念です。

今後、研究会は、小野さんの写真への情熱を引き受け、頑張って行きたいと思います。

御冥福をお祈りいたします。

小野望氏作品 (1/2)

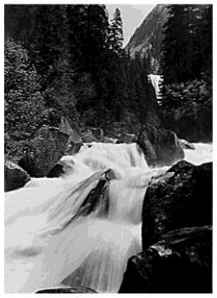
CACTUS


NEW PLACE

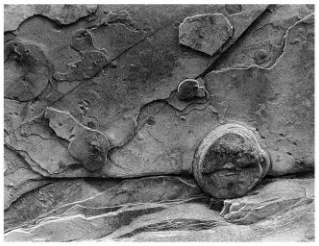
FOREST

NEW PLACE

STONE BRIDGE


VERNAL FALL

PADDY FIELD


EROSION

RED PASS, UTAH

NAVAJO LAND, ARIZONA

WATER LILY

WOODS

小野望氏作品　(2/2)

TRUMPET

WOODS

リンホフ･テヒニカ 4×5 蛇腹交換方法

佐野司郎

蛇腹も長い間使用していると劣化し、光線漏れを起こすようになります。
今回、蛇腹単品を購入し自分で交換しましたのでその手順等を報告いたします。
研究員皆様の御参考になれば幸いと思います。

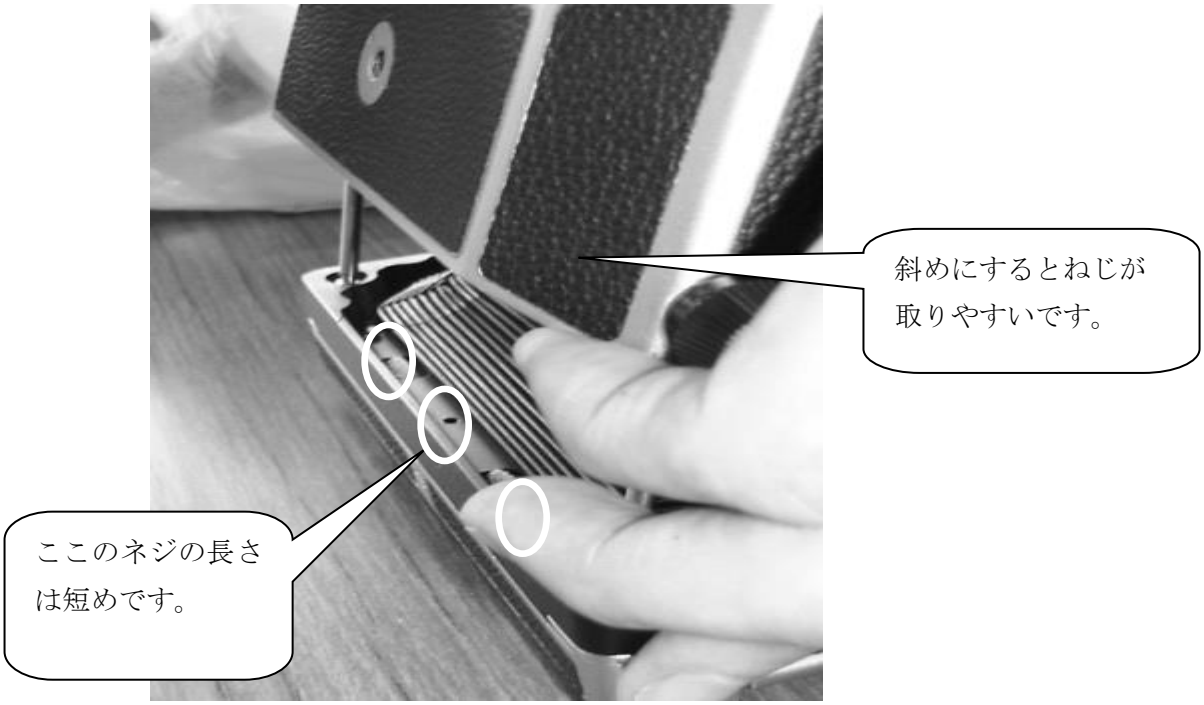
② 道具

- 蛇腹（リンホフ用）
- マイナスドライバー
- 色鉛筆（白）
- はさみ
- フイルムケース（３５㎜用）２個「ネジを一時保管するために使用」

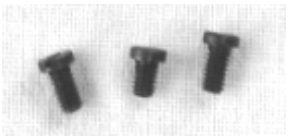
③ 手順

②-1 分解

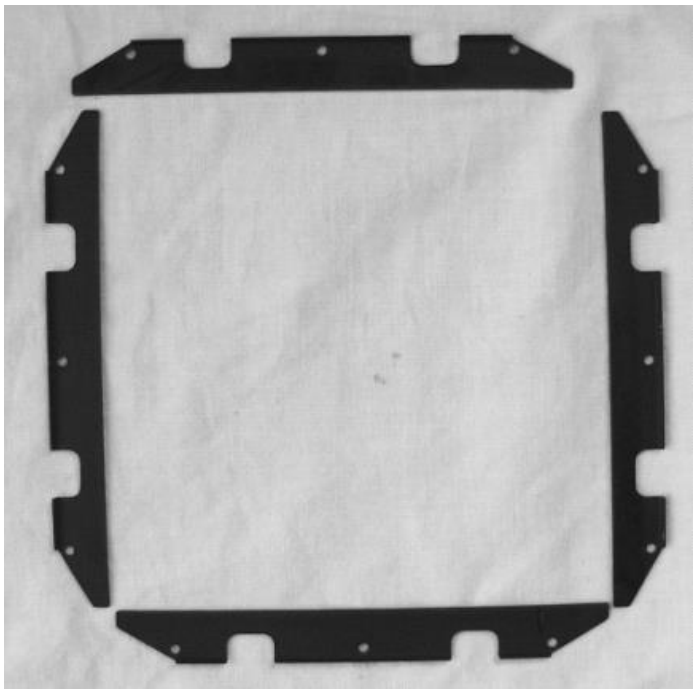
● ピントグラス側をはずす



４辺にそれぞれネジが３個ずつ（2 個は長め、１個は短めです）

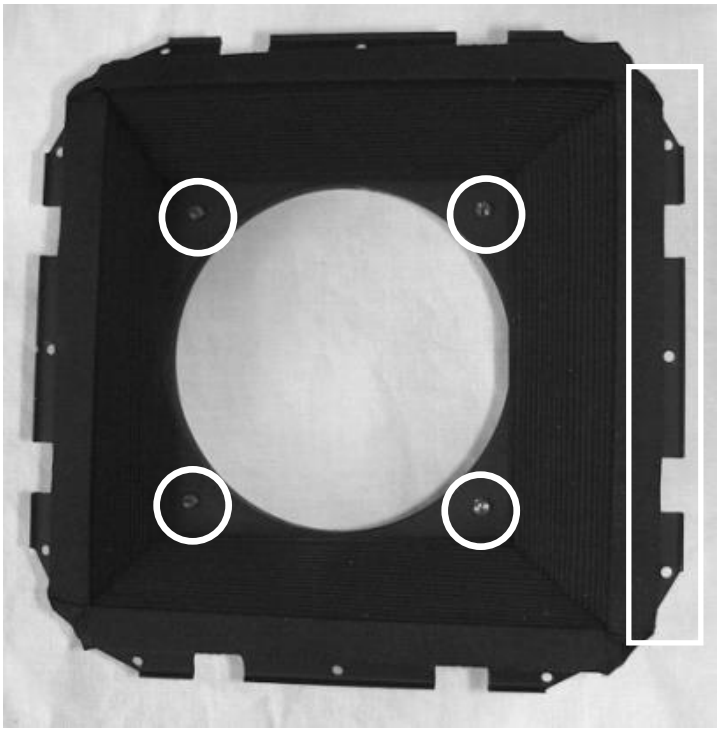


４辺全てをはずした後の本体側。レンズボード側より望む



ピントグラス側取り付け金具

● レンズボード側の内部のネジ４個をはずす。



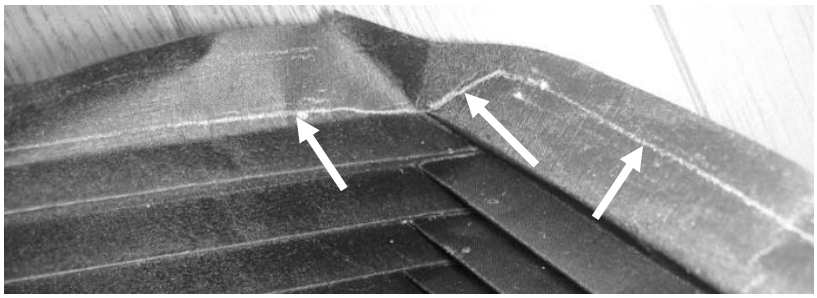
・取り外し後ピントグラス側より望む。（白丸はネジ位置）
・このネジはピントグラス側と大きさがちがいます。
・周りはピントグラス側取り付け金具（4 枚）

レンズボード側の蛇腹内にはレンズボード側と蛇腹を接合する為の金属板が入っています。この金属板には上下がありますので注意してください。

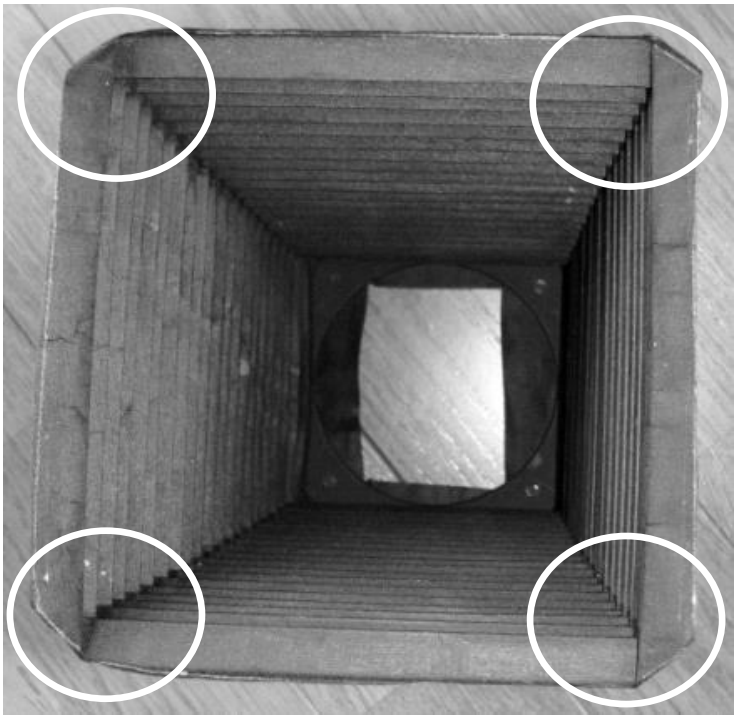
②-２　組み立て

● 蛇腹のピントグラス側の成形。

元の蛇腹（ピントグラス側）と同一の幅になるような部分を探します。
そうすると下図のような部分の白線（矢印線の先）が引けます。



四隅を切断すると次ページのようになります。



●蛇腹のレンズボード側の成形。

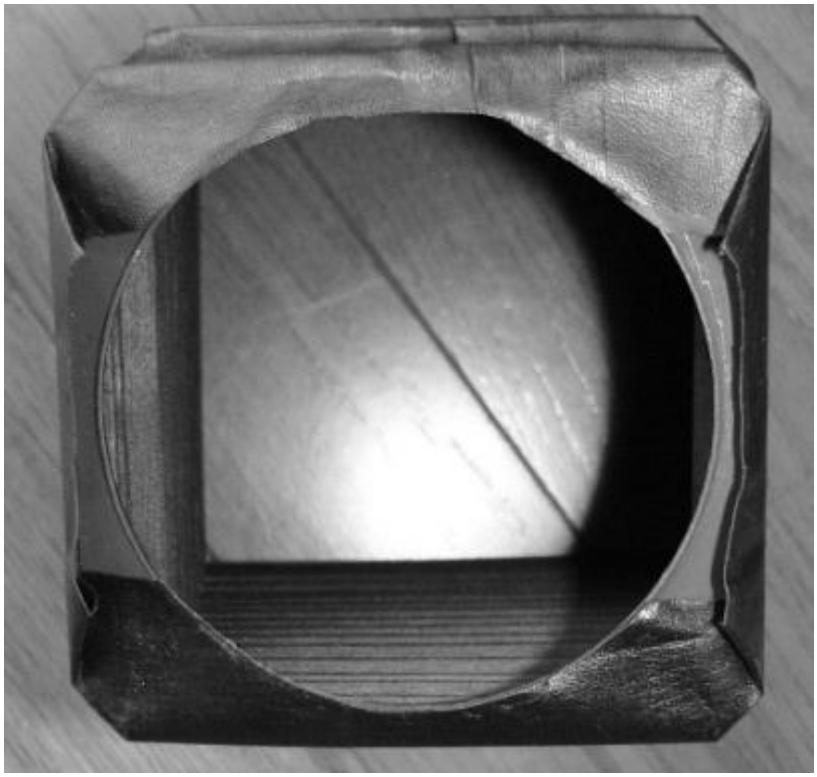
・レンズボード側の蛇腹内にレンズボード取り付け金具を装着します。

レンズボード側外より望む

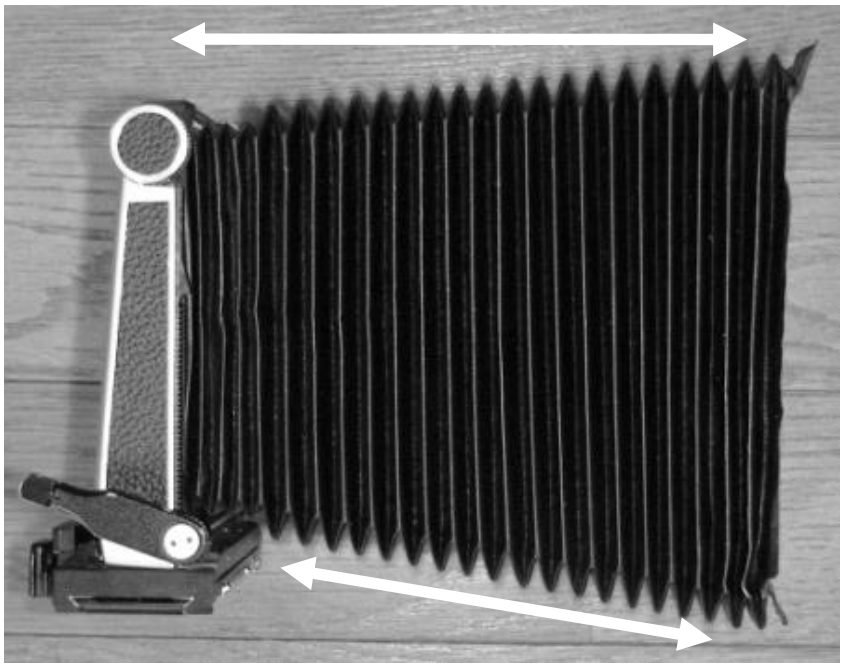
・レンズボート取り付け金具の内径に沿って余分な蛇腹を切断します。

白線で目印をつけ切断

・成形が完成した蛇腹



●蛇腹のレンズボード側への取り付け。



蛇腹の上下に気を付けてください。

注意:この作業を逆に蛇腹をピントグラス側から本体に取り付けますと作業に手間がかかります。

●蛇腹のピントグラス側への取り付け。

ピントグラス側取り付け金具４個を蛇腹の間に挟み本体に取り付けます

今回使用した蛇腹は牛革製のため硬めです。本体への最終取り付けにおいて上手く蛇腹が折り畳めない可能性があります。その場合取り付ける前にはオモシ等で蛇腹に２，３日間ストレス（折り畳む）をかけておいてください。無理に押し込み等を行いますと蛇腹の折り目に傷が付く可能性があります。

③最終確認。

撮影を行い光線漏れがないことを確認してください。

最後に蛇腹交換のご指導をお願いいたしました中島先生、ありがとうございました。

☆参考：蛇腹の入手先

有限会社　松秀（まつひで）

住所：東京都葛飾区柴又１－２０－３　（ TEL 03-3600-2640 ）

城ヶ島撮影会報告

荒井崇

・日時：２００８年1月２７日（日）
・場所：城ヶ島
・参加者：中島代表、石井、浜野、荒井、北野、松本、橘田、越後、倉又、山本、酒巻

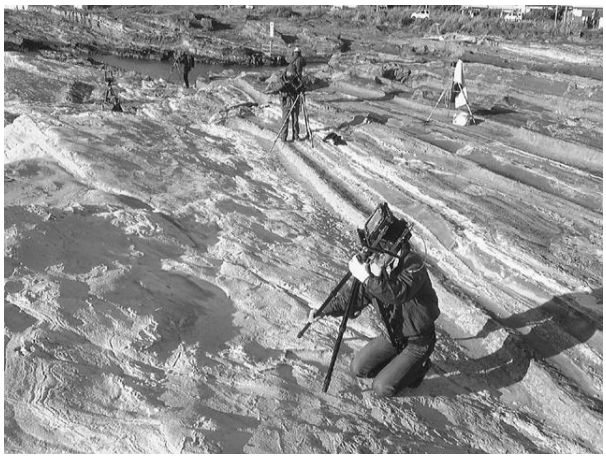
今年は作品のテーマを設定することになった。テーマは「海」。

海にまつわる撮影会を行い、作品を多く制作してもらうべく、北野氏（幹事）のご尽力により撮影会が実施された。

城ヶ島は三浦半島の最も代表的な景勝地。首都圏から近いため、週末は釣りや日帰りの観光客で賑わう。当日の天気は快晴。青空が一面に広がる絶好の撮影日和となった。

撮影はまず城ヶ島を象徴する灯台から。灯台は非常に魅力的なモチーフで、ウォーミングアップには最適。

灯台の白をゾーン８に設定すると灯台根元に生える植木の陰はゾーン２。ちょうど良い光線である。ただ、当日は風が強く、雲の動きが早い。



ちょうど良い位置に雲が配置されるかどうかが１つのポイントになった。

次は岩場での撮影。その複雑な岩の形は造形的な魅力が満載。昼食をはさんで３箇所を撮影した。

中島代表曰く。

「陽が傾くにつれ、ウエストンの撮影現場ポイントロボスのようにも見え、興味を強くしました。パズルを解くような海岸に最初は戸惑いますが、いくつかのキーが見えてくると形となります。このキーが見つかるまで時間をかけて動き回るのがよいと思います。その日に見つからなくても、別な日に行くと形になって見えるときも多くあります。日を改めて再度出かけることを薦めます。集中することが大事で、出来るなら一人がいいのです。」

再度一人で出向いて被写体を見直してみることを推奨していただいた。

ところで私は、撮影に関して何度も中島代表にアドバイスされるのに忘れてしまうことがある。それは、

「所定の大きさより小さなエリアは、スポットメーターでは測定できない。」

ということである。

例えば今回、岩のハイライト部の測光。ハイラ

イトエリアが微小なためスポットメーターはその周辺もいっしょに測定してしまい、実際の明るさよりも暗い値に測光されてしまう。よって本来はゾーン８なのに、ゾーン７と判断してしまうのである。

対策は、

・被写体に近づき、ハイライトエリア部分のみを測光する。

・測定したいハイライトエリアに近く、尚且つ明るさの近い広いエリアを探し、代わりに測光する。

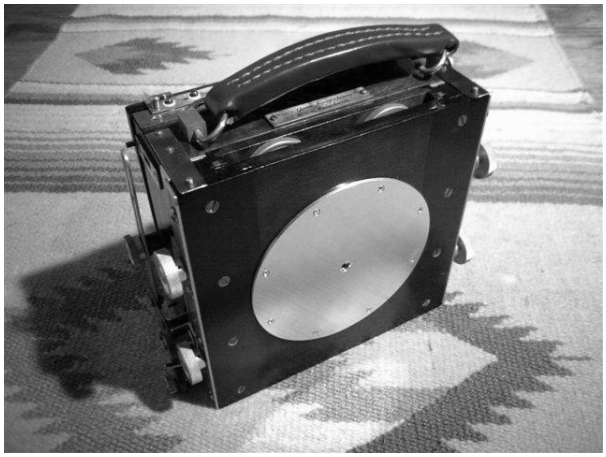
・被り布の白に近ければ被り布の白で測定してしまう。という強引な方法。

なお、シャドーや中間トーンの測定に関しても同様だ。今回もアドバイスされてふと思い出した次第である。

当日、撮影時に大きなトラブルが発生した。何と２人の方がカメラを壊してしまったのである。（中島代表と松本さん）

当日、時折訪れる突風に悩まされたが、その突風にあおられて三脚が倒れ、木製カメラが割れてしまったのである。中島代表はテープで修復し応急処置。松本さんは撮影を断念。風に対する対策を考えさせられたトラブルであった。

対策としては、「三脚にバックをかけておもりにする。」「足場のしっかりした場所に三脚を立てる。」などが考えられる。いずれにせよ強風には最新の注意が必要である。



［修理後のカメラ（中島代表が自力で修理）］

後日、中島代表は、東急ハンズで金属板を加工してもらい、自力でカメラを修理したそうである。（掲載写真参照）。一方松本さんは、メーカーへ持ち込み無事修理完了。２人ともレンズには支障が無かったそうで、事無きを得たとのこと。

夕方には有名なアーチ岩を撮影。海鳥の生息地を遠めに見ながら集合場所であるバス停に戻った。喫茶店で一服してから解散。本日の撮影会を終えた。

今回は、参加者人数も多く、大変充実した撮影会となった。自主的に企画を推進してくれた北野氏に感謝の意を表したい。